

IV 草地（永年草地）

造成時および以後の土壌の理化学性の改善により、良質牧草の安定的な多収を図る必要がある。

1 有機物の施用

種類と施用量 (t/10a)	施用方法	適応地域 ・土壌	備考
イ 堆肥 (牛ふん、豚ふんなど) 3～5t	草地造成時に土壌改良資材と併用して耕深 15cm に混和する。	全地域	マニユアスプレッダーの利用。

2 土壌改良資材の施用（耕起造成時）

1) 石灰質肥料

石灰飽和度 50～70%目標（黒ボクなど火山灰土壌は CEC の 50%、非火山灰土壌 70%）、苦土飽和度 5～10%目標で、苦土含有石灰資材（苦土炭カルなど）を耕起造成時、土壌 15cm に混層する。施用量の算出方法は、II 畑地・転換畑の項を参照する。

2) リン酸質肥料

耕起造成時に、リン酸吸収係数の 2%相当量のリン酸を熔燐で石灰質肥料と併用して、土層 15cm に混層する。

（施用量の計算式）

$$\text{リン酸吸収係数(mg)} \times \frac{2(\%)}{100} \times \text{仮比重} \times \frac{\text{改良する深さ(cm)}}{10(\text{cm})} \times \frac{100}{\text{熔燐の P2O5}(\%)} = \text{熔燐施用量(kg/10a)}$$

（計算例）

①リン酸吸収係数 2,500 の黒ボク土（仮比重 0.65）、改良深 15cm

$$2,500 \times \frac{2}{100} \times 0.65 \times \frac{15}{10} \times \frac{100}{20} = 250\text{kg/10a}$$

②リン酸吸収係数 1,000 の非火山灰土（仮比重 1.10）、改良深 15cm

$$1,000 \times \frac{2}{100} \times 1.10 \times \frac{15}{10} \times \frac{100}{20} = 165\text{kg/10a}$$

3 その他

- 1) 前記土壌改良資材は耕起前に半量、耕起後整地時に残り半量を施用して土壌とよく混和する。
- 2) 粗耕法による草地造成では、土壌改良資材の施用量を耕起法の場合の 1/2 とする。
- 3) 採草利用の集約草地では、生草の生産にともなって石灰、苦土、リン酸、その他微量元素などの養分収奪が著しいので、土壌分析結果に応じて数年ごとに改良資材を補給する。また窒素、加里の多施用につれて Mg/K の当量比が低下するので、当量比 2～3 程度に保つようにする。